『華厳経』天上篇の思想史的意味について

織田顕祐

一、『華厳経』を三篇に分けて考える意義（天上篇とはどういうことか）

『華厳経』は、六十巻（仏陀跋陀羅訳、旧訳）または八十巻（実叉難陀訳、新訳）という大部な経典であり、複雑な構成と途方もない思想を持った大乗経典である。構成の面では、七処八会、もしくは七処九会と言われるように、仏が水平や上下に移動しながら経典が進行する。『華厳経』研究の大成者である法蔵や澄観は、こうした立体的な経典の進行には全く関心を示さず、ただ五分に分けて『華厳経』全体を解釈している。[1] 法蔵は、六十巻『華厳経』の如来名号品第三から宝王如来性起品第三十二を一括して「修因契果生解分」と解釈しているが、経典の方では普光法堂会→天上四会→（八十巻では再度、普光明殿会にもどる）というダイナミックな展開を持っている。こうした会処の移動などは経典理解にあたって本当に何の課題も存在しないのであろうか。こうした疑問から、『華厳経』という大乗経典の本質を知るために、法蔵らの了解を一旦棚上げして、いくつかの視点から私見を公開してきた。その際に、佐々木月樵が提案した『華厳経』を三篇（地上篇、天上篇、地行篇）によって考察する方法に従った。[2]

佐々木の提案は法蔵らの思想的解釈とは異なり、『華厳経』の構成に従ってこの経の原意を考察しようという意図によるものである。

その見方は、まず仏成道のマガダ国と入法界品の祇園精舎（地行篇）に二分した上で、前半を寂滅道場・普光法堂（地上篇）と天上（天上篇）に分けるものである。この見方は参考資料に示したように、『華厳経』以前に存在した相当数の異訳単経とも良く符合している。こうした事実によって、七処八会または七処九会の構造に従ってその内容を検討することが『華厳経』の本質解明に有益であると考えられるのである。

改めて気付いたことであるが、普光法堂会においては文殊師利と普賢菩薩が中心となって経典が展開しているのであるが、この両者は天上篇には一部を除いてほとんど登場しない[3]。この事実は一体何を物語っているのか。こうした点も念頭に置きながら、ここでは天上篇の構造と思想について考察していきたい。なお、『華厳経』は新訳と旧訳の間にも見逃すことのできない問題があるが、今は『華厳経』の成り立ちそのものが課題なので新旧両経の問題は一旦置き、異訳単経と旧訳『華厳経』との関係に絞って考えていくことにする。また旧訳『華厳経』の他化天宮会は、十地品から如来性起品までを含んでいるのであるが、ここでは新訳『華厳経』の構成に従って十地品のみを考察の対象とする。

二、天上篇における十地品の異質性

右に述べたように本稿で『華厳経』天上篇と称する箇所には、忉利天宮会、夜摩天宮会、兜率天宮会、他化天宮会の四会が存在する。そして各会の中心はそれぞれ、十住、十行、十回向、十地にあると見られることから、これらは菩薩道の順序次第を表すものと考えられてきた。つまり菩薩は、順に十住→十行→十回向→十地と段階を踏ん

で修行を重ねていくという理解である。これは古来、中国・朝鮮・日本の伝統においてはごく一般的な『華厳経』理解であると言えよう。天台智顗も賢首法蔵もこうした理解の中にあると言える。その伝統は仏教理解の歴史として否定できない重要な問題であるが、一方『華厳経』の本質は果たしてそのようなものと言えるのだろうか。この点が、本稿の重要な関心である。

何故そのように考えられるのかと言えば、一に、十行品、十回向品には異訳単経が存在しないこと。そして両者は十住品や十地品に比較すると新しい教理を含んでいると考えられること。[4] 二に、十住・十行・十回向・十地という組織的な思想がインドには存在しないと指摘されていること。[5] 三に、十住品と十地品では重複する内容を含んでいること。[6] 四に十住・十行・十回向品の所説の様子と十地品では明らかに異なっていると考えられること、などが挙げられる。

この点は既に先行論文において所見を示しているので、[7] ここでは要点を挙げるに留め、本稿において重要な点のみ言及する。今挙げた第四の点とは次のようなことである。天上篇では仏が天上に昇ることをきっかけに会座が開始される。その様子は各会においてそれぞれ次のように説かれている。

〔忉利天宮会〕

爾の時世尊は威神力の故に此の座を起たずして須弥頂に昇り帝釈殿に向いたまえり。（大正9－四四一b）

〔夜摩天宮会〕

爾の時世尊は威神力の故に、道樹及び帝釈宮を離れずして夜摩天宝荘厳殿に向いたまえり。（同四六三a）

〔兜率天宮会〕

爾の時如来は自在神力を以て菩提樹座及び須弥頂妙勝殿上・夜摩天宮宝荘厳殿を離れずして兜率天宮一切宝荘

厳殿に趣きたまえり。（同四七八ｃ）

〔他化天宮会〕

（説かれていない）

サイドラインで示したように、忉利天会は菩提樹座を離れず、夜摩天会は菩提樹座と忉利天を離れず、兜率天会は菩提樹座と忉利天・兜率天を離れないという形式で各会が開かれている。それに対し他化天会ではこうした状況が全く説かれていない。また仏が説法のための師子座に昇ることも説かれていないのである。また天上篇の特徴として師子座に昇った仏が体から光明を放つことをきっかけに、照らされた菩薩たちによって仏徳を讃嘆する歌が説かれるのであるが、こうした点も十地品には全く説かれていない。その他の細かい点はここでは省略するが、天上篇四品のうち他化天宮会だけが他の三品と説法の形式が著しく異なっているのである。こうした点は何か重要な意味を持っているように思われるのである。

三、「原始華厳経（菩薩本業経）」における願行品（浄行品）と十地品（十住品）の関係

ア、願行品と十地品の異質感

参考資料に示したように、多くの異訳単経の中では、後の『華厳経』における第一の普光法堂会に相当するものが最も古い成立であると考えられる。この点で支謙訳の『菩薩本業経』は後の『華厳経』の原初の思想を知るために極めて重要な意味を持っている。そこで次に、『菩薩本業経』の所説について検討を加えておきたい。この点も既に先行論文において言及している。[8] 従って本稿では、前稿の不十分な点を中心に考察を加えて行きたい。

大正蔵経の『菩薩本業経』は、冒頭部分と「願行品第二」と称する部分と「十地品第三」と称する部分によって

構成されている。冒頭部分は内容的に『華厳経』の名号品・光明覚品に相応するのであるが、名号品と相応する部分の前の序分にあたる部分に、集会の菩薩たちが「尽く一生補処」（大正10－四四六c）であると示されている。そして、その菩薩たちは「十地から十因」に至る十種の「仏の本業」を聞くことによって、「我が瑕疵及び諸疑惑を断ぜよ」と願うのである。つまり、この経の菩薩たちは自らの実践における確証を求めているのである。この部分は『華厳経』の十地品の集会の菩薩たちが「阿耨多羅三藐三菩提に於いて皆退転せず」（大正9－五四二a）と説かれているのと対照的である。[9] この「一生補処」という概念は、本来仏伝経典に由来するものであると指摘されている。[10] 仏伝経典は成道した釈迦牟尼（本稿ではこれを果位と呼ぶ）が如何なる存在であるかを明らかにするものであり、果位の釈迦牟尼を前提として、その因行である菩薩行を本行として説くものである。従って因行の菩薩行は既に完成しているのであるから、この「一生補処」は先に成道が完成した上で因位の最後を定義付けたものであると言える。一方、これから成仏に向かう因位の菩薩の菩薩行においては菩薩行の成就は確定されたものではない。この『菩薩本業経』の集会の菩薩たちの「疑惑」とは、このような問題を背景としていると考えられる。その上で、「仏」の本質の無量性が文殊師利（菩薩本業経は敬首菩薩とする）によって示され、次に仏の足下の光明によって百億世界が釈迦牟尼仏の仏土＝娑婆世界であることが示される。

そして次に願行品が始まる。願行品の所説は前稿でも指摘したように、釈迦牟尼仏の本行を説くものではなく、行者である因位の菩薩の菩薩行である。その所説は一三五の偈によって一三五の菩薩の行いが説かれているのであるが全体は同一の語調を持っている。最初の偈頌によってそれを示してみよう。

家に居して戒を奉ぜんには　当に願うべし、衆生の
貪欲の意を解きて　空法中に入らんことを（大正10－四四七b）

ここでは、菩薩が家にあって規則を守る時には、一切衆生が貪欲煩悩の意味を良く知って空の中に住するように願うべきである、と説かれている。同じように菩薩が普段の生活の中で当面する課題が一三五種類説かれ、そこにおいて菩薩は常に一切衆生が解脱に向かうことを願うと説いている。その一三五の課題は一般在家者の普段の生活に他ならないから、ここに示されているのは在家菩薩の菩薩道の中心が衆生に対する「願」にあることを説いていると考えることができよう。

一方、『菩薩本業経』の十地品では「発意、治地、応行、生貴、修成、行登、不退、童真、了生、補処」の十地が説かれている。これらは始めに「往古より来た今、皆此れに由りて成ず」（大正10－四四九c）と説かれ、最後に「一切十方の古来現在の仏は皆此れに由りて興る」（同四五〇c）と説かれるように、仏が仏になるための古今普遍の菩薩道を意味している。この十地思想が『華厳経』十地品の十地思想とどのような関係にあるかが本稿の中心課題であるが、この点については一通りの考察を終えた上で言及する。ここでは、「原始華厳経」とみられる『菩薩本業経』の願行品と十地品の間には、同じく「菩薩道」と称しながらも同一には考えられない課題が存在する点を指摘しておきたい。

イ、この点を聶道真の翻訳を通して考察する

支謙訳『菩薩本業経』の願行品と十地品には更に別の異訳経典が存在する。聶道真訳の『諸菩薩求仏本業経』（願行品）と竺法護訳の『菩薩十住行道品』（十地品）である。この二経は支謙訳『菩薩本業経』との関係で注目すべき点がある。『諸菩薩求仏本業経』は『菩薩本業経』願行品と同じような形式で一三四の菩薩の実践を説き、最後に「是は菩薩の常の所行の道と為す」（大正10－四五四a）と結論付けながら、その後に釈提桓因が忉利天上において七

宝の師子座を用意して仏の来訪を待つ場面が説かれている（同）。これは支謙訳『菩薩本業経』では十地品の冒頭に説かれている記述であり、それが聶道真訳では浄行品相当として翻訳されているのである。また『菩薩本業経』十地品に相当する竺法護訳『菩薩十住行道品』では、この忉利天上の説法であることを示す記述が欠如している。しかし文脈を良く検討してみると、前者（『諸菩薩求仏本業経』）は忉利天上の菩薩名を列挙して突然のように経典が終了し、後者は忉利天上の記述を欠きながら忉利天上の諸菩薩の筆頭である「曇昧摩提菩薩」がいきなり登場するという、両経共に極めて不自然な構成となっているのである。この事実は、本来支謙訳『菩薩本業経』のような構成だった原典を何らかの理由によって二分したのではないかとの推察を可能にする。また聶道真訳『諸菩薩求仏本業経』という名称は、諸々の菩薩たちが成仏を得るための実践道という意味であるから、この経が本生菩薩の菩薩道ではなく、在家菩薩の成仏道を説くものであることを端的に表している。更に竺法護訳『菩薩十住行道品』では、これから説かれる菩薩の十住行は「釈迦文仏、前世の本願の結成する所の功徳なり」（大正10－四五四b）とし、「菩薩の舎は甚大なり、悉く虚空の如し」として、菩薩の十住の普遍性を強調している。要するに釈迦牟尼仏の本生としての菩薩行が普遍的なものであることを主張しているのである。この点は、既に指摘した支謙訳『菩薩本業経』における願行品と十地品の異質性を再確認することに通じる。

『開元録』巻第二によれば、聶道真は父の聶承遠と共に竺法護の訳場に親子で参列していた優婆塞である。経典翻訳にあたって筆受を務め、竺法護の没後にはその翻訳に手を入れたことが説かれている[11]。先に指摘した『諸菩薩求仏本業経』と『菩薩十住行道品』の関係はそうした事実を反映しているのかもしれない。また現在、聶道真の訳として経録に記載されているものは、普賢菩薩・文殊師利に関する経[12]、現存しないが十地経の異訳や、菩薩の初地と初発心に関するものなどである[13]。これらの事実から、聶道真は「原始華厳経」の中核を良く知っていたのではな

いかと推察されるのである。

以上の考察によって、本稿では仮に願行品に説かれる菩薩道を「善男子善女人の菩薩道」[14]、十住品に説かれる菩薩道を「本生菩薩の菩薩道」あるいはその進化型と呼び、両者を区別しながら以下の論考を進めていくことにする。

先行論文において、『華厳経』十地品の特徴として、それが「十波羅蜜」によって構成されている点を指摘した。[15]ところが「原始華厳経」においては、「波羅蜜」に関する言及が極めて少ない。この点は、支謙訳『菩薩本業経』、聶道真訳『諸菩薩求仏本業経』、竺法護訳『菩薩十住行道品』でも同様に確認することができる。[16]その数少ない例を比較してみると、再度興味深い点に気付くのである。例えば、願行品の第一〇四番目に、

人の食を与えざるときは　当に願うべし衆生の　般若の意を得て　望む無く惜しむ無きを（大正10－四四九a）

とある箇所は、聶道真訳では

菩薩未だ飯食を受けざる時は　心に念言すらく　十方天下の人をして　皆逆難有ること無く　悉く般若波羅蜜経中に入れしめんことを（大正10－四五三b）

とある。僅かな用例しか存在しないので確定的なことは言えないが、聶道真訳『諸菩薩求仏本業経』は『般若経』の影響をより強く受けていると考えられる。このような事実から、「原始華厳経」と般若波羅蜜もしくは波羅蜜思想との関係が次の課題となるのである。

四、本生の菩薩道（十住説）と善男子の菩薩道（波羅蜜思想）の発展としての十地品

ア、「本生の菩薩道」における「一生補処」「灌頂」の問題

『般若経』以降、無所得空によって六波羅蜜を実践することが菩薩の課題であることが明確になったと言えるが、

その場合の「菩薩」とは本生の菩薩ではなくて、凡夫菩薩（平川の用語）、本稿の文脈で言えば「善男子善女人の菩薩」である。それ故、この「六波羅蜜」が何を根拠に説かれ始めたのかという点が重要な問題となる。平川彰は、『般若経』以前に遡ってこの問題を解明する方途が存在しないとしながら、部派の波羅蜜説や初期大乗経典の波羅蜜説を詳細に検討した上で、「それは仏伝文学であると考えざるを得ない」と述べている。[17] 要するに仏の成道に習って凡夫菩薩も成仏を目指すということである。しかしここに大きな問題が生まれる。既に述べたように、本生の菩薩とは成仏した釈尊の根拠を因の面から説いたものであった。それ故、その因は既に成就したのであり、それが「灌頂」とか「一生補処」と説かれたのである。『菩薩本業経』の十地説の第十地が「補処菩薩法住」とされ、『華厳経』十住品の第十住が「灌頂住」とされるのはこのような意味を持っている。「一生補処」とは言うまでもなく、仏伝経典において兜率天から成仏のために地上に下る時の因位の釈尊のことであり、「灌頂」とはそれを転輪聖王の王子の即位の行事になぞらえているのである。それらはいずれも既に、成就した果において因を説いているのであるから、因の成就は既成の事実である。この点は、十地品の所説を検討する際に、極めて重要な点なので敢えて注意を喚起しておきたい。

イ、「善男子の菩薩道」における「六波羅蜜」「無生法忍」の課題

一方、凡夫菩薩の菩薩道においては、「一生補処」や「灌頂」は決して確定したことではない。なぜなら因が必ず果となるかどうかは因の段階では不確定だからである。仏伝経典において、因位の釈迦牟尼が燃灯仏によって「授記を得た」のは、菩薩としての釈迦牟尼の歩みが確実に成仏につながることを保証したものとも考えられるが、それとても成就した果における因の中での出来事である。

この凡夫菩薩の菩薩道における成仏を、因の段階で確実に保証するものとして『般若経』で説かれるようになったのが「無生法忍」と「阿毘跋致」という概念である。『般若経』における菩薩の修行過程は、「初発意→久発意（行六波羅蜜）→阿毘跋致→一生補処」の四段階で説かれている。[18] これは修行過程というよりも、善男子善女人が成仏に至るために欠くことのできない論理的な要素を順に並べたものと見るべきであろう。龍樹は、『般若経』に説かれる三乗共通の修行道において、声聞・縁覚と菩薩との分岐点をこの「阿毘跋致」に見て、『大智度論』において次のように言っている。

是を菩薩は無生忍法を得て菩薩位に入ると名づけ、阿鞞跋致と名づく。（大正25－五八〇ａ）

無生法忍とは一切の煩悩を断じて、有漏の肉体の報いを受けなくなった菩薩のことであり、その段階の菩薩は肉体の制約を受けることなく、任運に無量の変化身を為し、一切の仏国土を荘厳し、一切の衆生を教化するのである。そのようにして菩薩は無量の功徳を積んで成仏するとされる。『大智度論』中では「法身菩薩」「法性生身菩薩」などと説かれ、[19] 龍樹の阿毘跋致（不退転）の概念の中心を為すものである。これらの概念は、これから仏になろうとする菩薩にとっての根本問題であるから、既に仏となった釈迦牟尼の菩薩道である本生の菩薩の十地においては説かれる必然性が全く存在しない。

ところが『華厳経』の十住品の第六住「正心住」の箇所には、

無生法忍を退転せざることを得せしめんと欲するが故に。（大正9－四四五ｃ）

と説かれている。それで改めて『菩薩本業経』の該当箇所を検討してみると、『菩薩本業経』十地品ではこの文章に相当する部分のみが欠如している。従って『華厳経』十住品は何らかの理由によって「無生法忍」の概念を補ったのではないかと考えられるのである。

一方、『華厳経』の十地品では十波羅蜜を中心概念として所説が構成されている。そこでは八地の菩薩の中心概念として「無生法忍」が取り上げられている。もう少し経典の文意に沿って言うなら、十地品の六地、七地、八地は、この「無生法忍」をめぐる論理によって構成されていると思われる。つまり、六地では「無生法忍は未だ現前せず」（大正9－五五八b）と説かれ、七地では「是の菩薩は清浄行の故に無生法忍を得ん」（同五六二b）と説かれ、八地に至って、

是れを無生法忍を得て第八地に入ると名づく。不動地に入るを名づけて深行菩薩と為す。（大正9－五六四b）

と説かれている。要するに「未だ得ず」（六地）、「得ん」（七地）、「既に得」（八地）という形で「無生法忍を得る」ことの動的過程を表していると考えられるのである。そしてこの第八地の菩薩は任運に無量の智慧を積み重ねて行くので「不動」と称する。それ以外にも、十地品においては波羅蜜思想が要所要所で説かれているが、六波羅蜜から十波羅蜜に展開する動機がこの「無生法忍」にあると考えられるのである。

五、「十住品」と「十地品」の同異性

『華厳経』十地品の第十法雲地には次のような所説を見ることができる。

菩薩摩訶薩、亦是の如く職を受くる時、諸仏は智水を以て是の菩薩の頂に灌ぎて、灌頂法王と名づく。（大正9－五七二b）

つまり、法雲地の菩薩を「灌頂法王」と名づけるとするのである。更に、その少し後では次のように説かれている。

復た次に仏子よ、菩薩摩訶薩は法雲地に住して一世界に於いて兜率天より来下して乃至大涅槃を示す。（大正9－五七三b）

ここに説かれていることは、法雲地の菩薩が因位の釈迦牟尼仏のように一生補処の菩薩であるということである。この法雲地を「灌頂」「一生補処」とする視点は、既に述べたような『菩薩本業経』の十住説を明らかに継承していると言える。従って『華厳経』の十住説と十地説とは重複する内容を持っていると見ることができるのである。このように考えてみると、両者に共通する概念は、十の要素によって菩薩道を明らかにするという点であり、共通しない点は十住説が波羅蜜思想と関係が無いのに対して、十地説は「十波羅蜜」を基盤に説かれている点である。

本稿では、紙数の都合もあって、経文を一つひとつ丁寧に検討することなく、考えかたの道筋のみを述べている。それ故、論述にあたって具体性に欠ける点は否定できない。この点は今後の課題としたいが、本稿では、そうした経典内部の思想を検討していくために必要な全体的枠組みの検討をまず優先している。冒頭でも述べたように、『華厳経』の十住・十行・十回向・十地は直線的に展開する時間的な菩薩道のように考えられてきた。しかしながら、仮に十住品と十地品が重層する関係にあるとすれば、十行・十回向は段階的な課題ではなく、十住説を補いながら釈迦牟尼の本生の菩薩道を、大乗仏教として明らかにしていく意味を持つものと考えられるのである。先に、十住・十行・十回向のそれぞれが互いに離れず、更に道場菩提樹を離れない関係で説かれ、十地品はそれらとは異なる構成であることを指摘した。それは以上のような『華厳経』の成立背景を物語っているのではないかと考えられるのである。

小結、『華厳経』天上篇の構成と思想史的意味

『華厳経』天上篇の十住・十行・十回向は、本生の菩薩の菩薩道である十住思想を基盤として、そこに十行と十回向を加えて、それらが釈迦牟尼仏を成り立たせていることを説くものと考えられる。その十住・十行・十回向の

要点は『華厳経』に次のように説かれている。

〔十住品〕

仏子よ、菩薩の種性は尋深広大なり、法界虚空と等し。一切の菩薩は三世諸仏の種性中より生ず。（大正9－四四四c）

〔十行品〕

諸仏子よ、菩薩の行業は不可思議なり、広大なること法界の如く究竟せること虚空の如し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は三世諸仏の所行の法を学ぶが故に。（同四六六b）

〔十回向品〕

仏子よ、是れ菩薩摩訶薩の不可思議の大願にして悉く普く一切衆生を救護するなり。菩薩摩訶薩は此の願を立て已りて三世諸仏の回向を修学すべし。（同四八八b）

これらは、十住・十行・十回向の各品において、具体的な所説に入る直前に示され、それぞれの課題（十住・十行・十回向）の全体的な意味を表すものである。「種性」と「所行の法」と「回向」は、菩薩道の基盤（種性）と成仏のための徳目（所行の法）、衆生済度と諸仏供養（回向）という意味であり、菩薩道を構成する不可欠の三要素である。ちなみに、『菩薩本業経』の十地品の該当箇所には、

仏を求めんと欲するには、十地住有り。往古来今に皆此れに由りて成ず。（大正10－四四九c）

とあり、十地住各説の末後には、

十十の法成ずるに従いて、現世に無上正真の道を紹代するを得て、最正覚と為り天下を度脱す。（同四五〇c）

とあって、釈迦牟尼がこの「十法住」によって成仏したことを示している。この部分は説主である法意菩薩の言葉

であるが、それを受けて仏が改めて、

一切の十方の古来現在の仏は皆此れに由る（同）

と言うのである。そして本稿の論旨を裏付けるかのように、『華厳経』十住品にはこの部分に該当する経文が存在しない。

『菩薩本業経』の十地品と『華厳経』の十住品とは、経文の長短はあるものの、内容的にはほぼ対応している。しかし、先に挙げた第六住の「無生法忍」の所説と、最後のこの部分の二箇所だけが対応しないのである。『菩薩本業経』では、無上正真道を完成するための菩薩道として、十住のそれぞれを十に開いているので、最後に「十十」と言うのであるが、菩薩道の具体的な内容についてはこれ以上の所説を見ることはできない。このように考えると、『菩薩本業経』十地品のこの部分を削除して、それを「種性」「所行の法」「回向」に開いたものが、『華厳経』の十住・十行・十回向なのではないかと考えられるのである。そして、これらは釈迦牟尼仏の本行としての菩薩行であるから「道場菩提樹」を離れないという形式によって説かれているのである。

一方、十地品は「善男子の菩薩道」としての波羅蜜、特に十波羅蜜と十住とが重なったものであるから、これらとは切り離して説かれなければならないのである。

十行品では、諸仏の本行としての「等心恵施、持戒清浄、修習忍辱、厳修精進、第一正念、寂滅身口意業、無著心の自利利他、善根成就、一切衆生の清涼法池、第一誠諦語」が説かれており、最初の六は傍線のように、釈迦牟尼のジャータカとしてまとめられた六度を背景とした大悲行が説かれていると見ることができる。[20] また、十回向品では冒頭に六波羅蜜等を修習した善根を衆生に回向せよと説かれている。[21] これら十行・十回向品は十住品に比べて後に成立して『華厳経』に組み込まれたものと考えられ、仏伝経典を踏まえた大乗仏教思想の深化を表しているの

ではないかと考えられる。

つまり、天上篇の前三会は本生の菩薩道である十住思想と、本生菩薩の六度と回向によって大乗の菩薩道を明らかにし、それらが過去未来現在を貫通する普遍の菩薩道であり、それに基づいて現に今釈迦牟尼が成仏したことを表しているのである。これに対し、十地品は、それらとは別に菩薩の十地の階梯が十波羅蜜によって成り立っていることを説いている。これは明らかに、『般若経』との融合の結果であると考えられる。『般若経』は般若波羅蜜が諸仏の根源であると説く。[22] 一方、「原始華厳経」は本生の菩薩の十住が三世諸仏の拠りどころであると説く。いずれもが諸仏の拠りどころを説いているわけで、両者はより高次の次元で融合する意義があると言えよう。『華厳経』の十地品と入法界品が十波羅蜜を中心に説かれているのはこのような事情を反映していると考えられるのである。このような視点から見て、十波羅蜜を基本に展開する十地品や入法界品は、後に『華厳経』の中心を担うことになったとしても、それらが当初から先駆的に『華厳経』の中心軸を形成してきたと考えることは到底できないのである。他にも、『華厳経』の根本的な主題を考察するためには、文殊師利と普賢菩薩の存否を通して対照的である天上篇と普光法堂会との関係を明らかにしなければならない。更に前半（地上篇と天行篇）と入法界品（地行篇）との関係も明らかにしなければならないが、こうした点は今後の課題とする。

なお本稿は、二〇一七年十一月に開催された北京大学仏教研究中心主催の「第三回世界華厳大会」（十日～十二日）における研究発表を一部改めたものである。

註

1　法蔵の五分説については、『華厳経探玄記』巻第二（大正35－一二五ｂ）に説かれる。この中で法蔵は、如来名号品第三から如来性起品第三十二までをひとくくりにして「修因契果生解分」と名付けている。

2　佐々木月樵「華厳経の新しき見方」（『佐々木月樵全集』第五巻、国書刊行会、一九七三年）三六五－四四五頁

3　ＳＡＴ大正新脩大蔵経テキストデータベースの検索結果による。ただし、十回向品に至ると「普賢行」「普賢菩薩行」といった用語が説かれているが、これは菩薩行を全体的に指しているのであって、「普賢菩薩」という一個の尊格を表現するものではないと考えられる。

4　十行品に「盧舎那仏本願力の故に」（大正９－四六六ｂ）、十回向品の各説の冒頭に六波羅蜜が説かれること（同四八八ｃ）や、「普賢行」「普賢力」（同五四一ｂ）といった概念が説かれていることによる。

5　山田龍城著『大乗仏教成立論序説』（平楽寺書店、一九五九年）二五八頁など参照。

6　この点は本稿の結論の一部なので、後に詳述する。

7　拙稿「『華厳経』天上篇の構造と思想について」（『仏教学セミナー』九七号、二〇一三年）の「三　天上篇の内容について」を参照されたい。

8　拙稿「七処八会の構造から見た『華厳経』の基本思想について」（『仏教学セミナー』一〇二号、二〇一五年）の「二　そこから考察される原始『華厳経』の中核思想について」を参照されたい。

9　なおこの部分について、『十地経論』所釈の『十地経』では、

一切不退転にして、皆一生に阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。（大正26－一二五ａ）

とある。

10　阿理生稿「ekajātipratibaddha ―いわゆる一生補処―について」（『印度学仏教学研究』八六号、一九九五年）など参照。

11　西晋の聶道真については、常盤大定著『後漢より宋斉に至る訳経総録』（国書刊行会、一九七三年）の七〇八－七一六頁に必要な情報が整理されている。その生涯と訳経については『開元録』巻第二（大正55－五〇〇ｂ～五〇一ａ）参照。

12　『開元録』には聶道真の翻訳として次のような経典を挙げている。

『文殊師利般涅槃経』（大正14所収）

『三曼陀颰陀羅菩薩経』（大正14所収）

13　現存しないが次のような経名を挙げている。

十住経十二巻
大方広菩薩十地経一巻
菩薩初地経一巻
菩薩初発時経
初発意菩薩行易行法経

14 『菩薩本業経』願行品で敬首菩薩が、
若し、族姓子、族姓女の仏道を成ぜんと発さば～（大正10－四四七b）
と前提して一三五の課題を説いているのでこのように呼んでみたい。

15 拙稿「七処八会の構造から見た『華厳経』の基本思想について」（『仏教学セミナー』一〇二号、二〇一五年）の註（25）に
まとめたのでそこを参照されたい。

16 SATテキストデータベースの検索結果による。

17 平川彰稿「六波羅蜜の展開」（『印度学仏教学研究』四二号、一九七三年）五三五頁参照。

18 山田前掲書二四四頁に詳しく諸本が対照されているので参照されたい。

19 法身菩薩については、大正25－一四六b、一八八cなどに説かれている。法性生身菩薩については、同二六五b、三一二c
などに説かれている。

20 例えば最初期の仏伝経典である『修行本起経』は、兜率天から来下する因位の釈迦牟尼の積徳について、六度無極の布施、
持戒、忍辱、精進、一心、智慧を行じ～（大正3－四六三a）と説いている。

21 大正9－四八八c

22 例えば『摩訶般若波羅蜜経』巻第二十一方便品に、
十方現在の諸仏も亦般若波羅蜜中より生ず。過去未来の諸仏も亦般若波羅蜜中より生ず。（大正8－三七二b）
とある。

（大谷大学教授　仏教学）

〈キーワード〉『菩薩本業経』、『諸菩薩求仏本業経』、本生菩薩

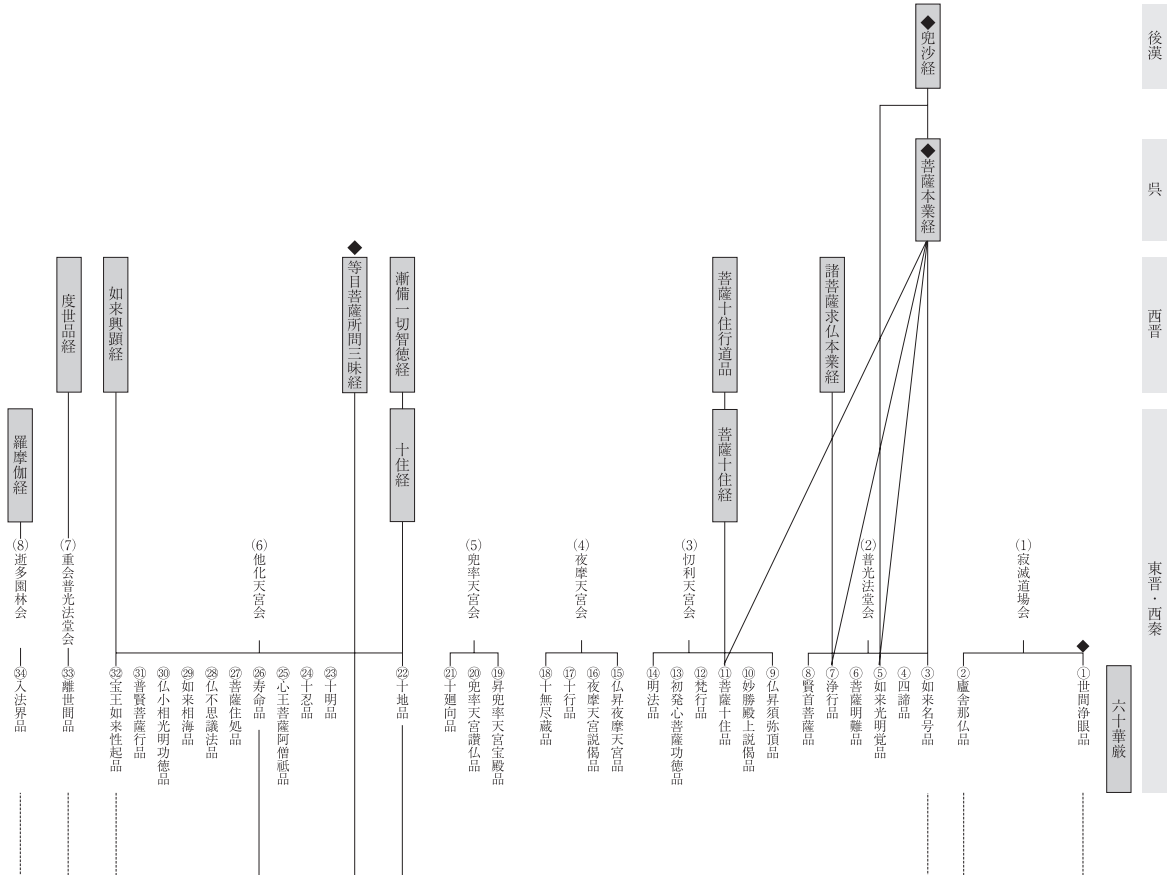
唐

- 法護五分記
- 教起因縁分
- 発菩提願成就分
- 修因契果生佛分
- 顕無辺仏土功德摩
- 説法儀修成行分
- 依人証成傷分　入法界品

八十華厳

- ①世主妙厳品
- ②如来現相品
- ③普賢三昧品
- ④世界成就品
- ⑤華厳世界品
- ⑥毘盧遮那品
- ⑦如来名号品
- ⑧四聖諦品
- ⑨光明覚品
- ⑩菩薩問明品
- ⑪淨行品
- ⑫賢首品
- ⑬昇須弥山頂品
- ⑭須弥頂上偈讃品
- ⑮十住品
- ⑯梵行品
- ⑰初発心功德品
- ⑱明法品
- ⑲昇夜摩天宮品
- ⑳夜摩宮中偈讃品
- ㉑十行品
- ㉒十無尽蔵品
- ㉓昇兜率天宮品
- ㉔兜率宮中偈讃品
- ㉕十廻向品
- ㉖十地品
- ㉗十定品
- ㉘十通品
- ㉙十忍品
- ㉚阿僧祇品
- ㉛寿量品
- ㉜菩薩住処品
- ㉝仏不思議法品
- ㉞如来十身相海品
- ㉟如来随好光明功德品
- ㊱普賢行品
- ㊲如来出現品
- ㊳離世間品
- ㊴入法界品

(1) 寂滅道場会
(2) 普光明殿会（文殊師利）
(3) 忉利天宮会
(4) 夜摩天宮会
(5) 兜率天宮会
(6) 他化天宮会　仏説十地経
(7) 重会普光明殿会（普賢菩薩）　毘盧一切仏刹功德経
(8) 三重会普光明殿会（普賢菩薩）
(9) 逝多園林会　四十華厳

『華厳経』新旧対照表（参考資料）

◆…初成道を説く経典